

声 VOICE

観光を支える方々の声を寄稿、インタビューを基にお届けします

大学院で観光経営を学ぶ意義

本学経営管理研究科に4月に観光マネジメント専攻(MBA)を開設して、春学期が終了した。開講当初にありがちなバタバタもあって、広く観光業界の社会人の院生に参加してもらい、さまざまな試みを日々実行してゆくという刺激的な毎日であった。

未来を描く基礎学力を身に付ける

立命館大学大学院 経営管理研究科 観光マネジメント専攻 専攻長・教授 石崎 祥之氏



「旅の楽しさ」が重要な意味を持つ。さらにその基礎を築くためのマーケティングやファイナンス等の基礎科目がある。これらを受講することで、感覚ではなく、数字やロジックで経営を行う力を養うことができる。

観光地飲食店がインバウンド需要を取りこぼさぬために

「三つの課題」に準備、対応を

Tri-win 代表取締役社長 伊藤 通康氏



私たちの活動する飛騨高山には「夕食難民」という言葉がある。急激に回復したインバウンドのお客さまに対して夕食を提供できるお店が少なく、供給不足状態が常態化してしまっていることを指す。飲食店の数が不足しているのではない。対応力が不足している。観光地は遊ぶ・食べる・泊まるがそろったことで価値を構成している。この欠落はただではない状況であることは明らかで、当地の観光リソースはコロナ前からこれを予測し早々と難民化を防ぐように問題提起を続けてきた。しかし、チェーンにはインバウンド毎夜のように駅前のコンビニのこた返しに思えない。二エンスストアや大手F&

「オール宇都宮」でMICEを推進

魅力と交流を創出し続ける「MICE都市・うつのみや」を目指して

一般社団法人宇都宮観光コンベンション協会 常務理事 鈴木 孝美氏



「餃子のまち」として全国区の知名度を誇る「宇都宮」だが、人口減少の波が、本市では、1000年先も発展し続けるまちを目指して交流人口の増加などを図るため、「観光・MICE」の振興に力を入れている。

農山漁村で生産者と交流

観光資源を共に守り育てるパートナーに

雨風太陽 代表取締役 高橋 博之氏



私たちの会社が「昨年からは始まった」ポケモンおや地方留学」は、これまでの消費型観光から脱却を目指す一歩だと考えている。夏休み、岩手や和歌山をはじめとする全国12カ所の農山漁村を舞台に1週間、親は自然豊かな環境でワーケーションしながら、小学生の子供は農家と漁師の生産現場で自然を濃密に体験する。体験アクティビティの内容を一部、紹介しよう。プロのハンターの鹿狩り同行だ。夜明け前に猟師の車で千石級の高原に向かい、現場に到着すると翌日足鹿を探し始める。鹿を目視でも鹿は脳死状態にあるの

位置情報データを用いたデジタル観光統計

旅行動向を可視化、兆しに対応

株式会社プログウォッチャー おでかけ研究所所長 酒井 幸輝氏



協会のホームページで一部、一連の流れの不確実性に対応する視座を持つことが重要だ。これは時間と努力がかかりますが、先進的な地域を中心に、全国で成功事例が生まれ始めています。

地域DMOの挑戦と課題

観光復活の波に乗るために やり続ける覚悟を

プラネットヨネザワ CEO 宮脇 浩聡氏



私がDMO構想を地域に提案したのは、2019年10月。そこから1年ほどでプロジェクトが進み、22年5月、コロナ禍の正式に地域が合意しDMOを立ち上げ、23年に補完DMOとなりました。